

わんぱくタイフの 大あれ三学期

ジーン・ケンプ作 松本亨子訳



NDC 933

178 P

201mm×150mm

商標登録番号 第730697号 第852070号 登録許可済

児童図書館
文学の部屋

わんぱくタイクの大あれ三学期

昭和56年9月20日 初版発行

昭和57年5月10日 初版二刷発行

定価 1,200円

訳者 松本亨子

発行者 竹下晴信

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 凸版印刷株式会社

発行所 株式会社 評論社

(〒101) 東京都千代田区神田神保町2-16

電話代表 (265) 1961

振替東京 8-7294

ISBN4-566-01213-1

〈検印省略〉

落丁・乱丁本は本社にておとりかえます

(A-2)

わんぱくタイクの大あれ三学期

ジーン・ケンプ作 松本亨子訳

キャロライン・ダイナン 絵



エクセター市，セント・シドウェル校の
教員と生徒のみなさん，そして，とくに
話を聞かせてくれたディックにささぐ

THE TURBULENT TERM
OF TYKE TILER

by

GENE KEMP

© Gene Kemp 1977

Illustration © Faber and Faber 1977

Japanese translation rights arranged with
Laurence Pollinger Ltd., London through
Tuttle-Mori Agency Inc., Tokyo.

「温室の屋根の上の子ども」から

ずぼんのしりを 風がかすめる
足の下でガラスがきしきし音をたてた
日ざしにまばゆいガラスごしに
とがめるように見あげる
咲きかけのきくの花ばな
雲のかたまりが二つ三つ
東に向かって飛んでゆく
疾走する馬の背のように
波打つニレの並木
そしてみんなが
みんなが 指をさし 叫んだ！

テオドル・レトキ（米国の詩人 1908～63）

登場人物

クリクルビット小学校

校長先生

ソマーズ先生（女）、教頭きょうとう

ウィリアム・マーチャント先生（男）、6年3組の担任たんにん

シャンダース先生（男）、音楽担当

ボン先生（女）、ホームルーム担当

ベネット夫人、秘書ひしよ

バギットさん通称バグジーさん、用務員ようむ

ジェニー・ハニウェル、教育実習生

6年3組の中心人物

タイク・タイラー

ダニーことダニエル・ブライス

イアン・ビット

パッツィ・ドリュウ

マーチン・ニーショウ

ケビン・シムズ

ロレイン・フェアチャイルド

リンダ・ストートウェイ

レッドマウント区スミゼン通り八番地の家

とうさんのエドワード・タイラー、機関士

かあさんのメアリ・タイラー、病院の夜勤看護婦

ねえさんのベリーことベリル、十七歳、Aレベル試験をめざす秀才高校生
にいさんのスパッドことスタンリー、十四歳、ドウソン中学校に通学

その他

克蘭ブル、短足で青っぽい毛の入ったコッカスバニエル犬

ファティ、ぶちのネズミ

「ごみ箱について、ひとつじょうだんを教えようか。
もつとも、ごみみたいな話ばかりだね。」

I

「やぶにらみ先生、なんといつた？」

「わしにや、この子ら目にあまる」

ダニーとふたりで、先生たちのお茶代を集め食堂までくると、ダニーが突然10ポンド紙幣(約五千円)を、ひらひらふって見せたんだ。最初、なんなのかわからなかった。ダニーのぼっちい手じゃ、とてもお札には見えないもんな。あわててあいつを、食堂の中におしこんだ。金曜日の午後三時五分前なら、ぜったい、からっぽ請け合いなんだ。休み時間のドタバタさわきが遠ざかり、ざあざあ校舎の屋根を打つ雨音だけが聞こえる。

「どっから取ってきたのさ？　このとんちき」

「赤毛のボンのさいふからだよ。口をあけっぱなしにして、おいてあったよ。つくえの上にさ。だから取ったんだ。だれも見えてなかったよ、タイグ」

ダニーがこのとおり、いったわけじゃない。わが友ダニー・プライスのしゃべり方ときた

ら、知り合いの中でも最低さいていさ。言語障害げんごしょうがいとかいうんだ。数かずをかぞえれば、「いいじ、にーい、ぎーん、じーい、ごーお、ろおーぐ、じーぢ」という具合ぐあいだ。おまけにダニーのやつ、むかつくようなゆでカブやキャベツのにおいがある、食堂の中につつ立たっちゃって、こうぬかしたんだ。

「だからどっだんだ。だれにも見られ、ら、つたよ」ほんとうにびっくりぎょうてんのぎょぎよぎよだ。

ダニーをゆすぶってやった。かんの中でお茶代のお金かねが、チャリンチャリン音をたてた。ちようどそのとき、中国人みたいになかつこうをしたチビの一団だんが、わめいたりおし合いへし合い、けとばし合いながら、こっちの方へなだれこんできた。二年の連中、また「アラジン

のらんぷ」（「アラビア夜話」の中の中国の話）の劇げきをやってたんだ。それとも中国の革命かくめいごっこだったのかもしれない。

とつきにダニーから10ポンド紙幣しへいをひったくって、セーターの下にかくすことにしたよ。お札はがさがさと、ぞつとするような音をたてた。食堂はゆでカブとキャベツのにおいがひどいんだ。いっくも早く逃げ出したかったので、ダニーをろうかへおし出した。

「わかんないの？ わかっていないのかい？ このうすのろとんま」となりの3年2組の教

室の、ギャーギャー声にまけじとどなってやった。まるで十曲を一度に練習しているみたい
にやかましいんだ。ダニーが口をひらくより先に、休み時間の終わりをつげるベルが鳴った。
それで6年3組の教室へ向かった。ダニーが何かいいたそうに、横っ走りについてくる。

「何をかつかしてるの？ タイクったら。怒らないでくれよ。ねえ、タイク」

返事をしてやらなかった。

「きみのために取ったんだよ。山分けにしたいんだ。すきなもんが、なんでも買えるんだよ、
タイクってば」

まるっきり無視してやった。腕を引っぱるので、ふりはらった。

「めんどろなことになるんだよ」

「タイク、タイクってば」

教室に着いた。すみっこで、ロレイン・フェアチャイルドとリンダ・ストートウェイが、
スカートをひるがえし髪をふりみだし、おどっている。知らん顔ができない男の子たちに、
見せびらかしているのだ。あだなが「でか頭のビット」のイアン・ビットは、ケビン・シム
ズと取っ組み合いのさいちゅうだ。マーチン・ニーショウは戸棚の上にのぼって、れいのご
とく大声で命令している。お札が落っこちないように、セーターの上からしっかりおさえな

がら、ダニーをすみの本棚^{ほんだな}の方へ追いたてた。

「いいかい、ダニー。わかんないの？ ほんとうにわかってないのかい？ このお金、使っちゃいけないんだよ。どこで手に入れたのかって聞かれるよ。それにきみのいうことなんか、だれもほんとうにしないよ。かあさんが呼ばれて、きみはおしおきさ」

ダニーはしょんぼりした。ごみ箱あさがりが見つかったときの、わが家の犬^やみたいだ。ワン公^{こう}のやつ、やめられないくせに見つかる、とても悪そうにするんだ。ダニーも同じだ。もっともダニーの場合はごみ箱あさりではなく、お金なんだけど。ばれたときのダニーときたら、うちの犬^{いぬ}みたいにあわれっぽい表情をする。そんな顔を見ると、だれでもかわいそうに思ってしまうんだ。通りすがりのおばあさんたちが、「なんてかわいらしい顔なんでしょ」といったりする。ダニーの治療^{ちりよう}テストのため学校にやってくる人たちのだれもが——聴覚^{ちようかく}や言語^{げんご}障害^{しょうがい}を検査^{けんさ}する女の人たちも、精神科^{せいしんか}のお医者さんも、ダニーをすきになっちゃう。そして、ほかの子どもたち以上にダニーのことを、親身^{しんみ}になって世話をするんだ。

「あの子はかしこそうに見えるのに。何かの障害のせいなんだよ」おとながこういうのを聞いたことがある。

そのとおりさ。障害があるってこと、知ってるんだ。もう何年も前から、わかってたよ。

つまりあいつのおつむのことだよ。そのほかにもわかつてることがあるんだ。どうしようもないばかりのくせに、いつもひとに、自分の望みどおりのことをさせるといふとき。けど今度ばかりは、そうはさせないぞ。なんだってこの10ポンド紙幣しへいのせいで、ごたごたするのはごめんだからな。じょうだんじゃない。

「だめだよ、ダニーぼうや。きみのものにはできないよ」

「いやだい」

「ぜったいだめだ、いいかい。さあ、赤毛のボン先生のところにもどしといで」

ダニーの顔がまっ赤になったかと思うと、さっと青白くなった。それからわが愛犬克蘭ブル克蘭ブルみたいのに、からだをふるわせはじめた。

「そんなことできないよ。この前のとき、ぼくが怒おこられたの知ってるだろ」

「じゃあ、返してきてあげる」

「だめ、だめ。とったのがぼくだってこと、先生にばれちゃうよ」

「そいじゃ、いったいどうすりゃいいの？　これでモノポリモノポリ（銀行ゲーム）をしようってのかい？　かべにかざっとくつもり？」

「かくすんだよ。そいであとで返すのさ」

「じょうだんしろ！」

「お願いだ。タイク、やってくれよ。きみは頭がいいもん。なんだってできるよ」

「うへー、あんがと」

気分が悪くなってきた。また、ゆでカブのにおいをする。

「ばっかやろ。ダニー・ブライス……」

もっていつてやりたかった。でも先生が教室に入ってきたんだ。さわぎが静まった。担任はウィリアム・マーチャント先生。まあ話がわかるんだ。先生のことは、あとでもっと話すよ。金曜日の午後の最終授業は、生徒が自分たちのやりたいことを選択できる、自由な学習時間なんだ。ほかの連中にとっては、まったくそのとおりさ。でもこっちはそれどころじゃない。選択の道はないんだ。たったいま、赤毛のボン先生がお金をぬすまれたことに気づき、校長先生といっしょにやってきて、われわれ生徒を調べるかもしれないもの。この前のときはそうだった。今度もそういうことになりそうだ。赤毛のボン先生のハンドバッグにもどせるときがくるまで、このやっかいな紙きれをセーターの下から、どこか安全な場所に移さなくちゃいけない。教壇に近づいて、先生に聞いてみた。

「先生、お茶代を教務室へとどけにいつでもいいですか？」

「いいよ、タイク」

ふいに、お金がずり落ちてくるのがわかった。片手でお札のある場所をおさえ、もう一方の手でお茶のかんを持った。

「どうかしたのかい？」

「なんでもありません」

「少し顔色が悪いね。どこか痛いのかい？」

教室の外で、声がしたような気がした。

「いいえ」

校長先生たちがやってくる前に教室の外に出ようと、全速力でドアに突進した。だれも、ろうかにいなかった。ほっとひと息ついて、校舎の外がわの最短コースを、教務室まで走った。雨がざあざあ降っている。空でだれかが、バケツの水をひっくり返しているみたいだ。小さな湖くらいはありそうな水たまりの中を、ばしゃばしゃ水をはね返しながら急いでいると、突然、お札がすべり落ちてしまった。はげしく雨が降りかかり、お札は水面にういたり沈んだりしている。そうだ、これは名案だ。このままほっといて、だれかに見つけさせればいい。これで万事解決だ。